# 逢魔が刻に鬼が哂う

路傍之杜鵑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逢魔が刻に鬼が哂う

【Ｎコード】

Ｎ４６１２Ｖ

【作者名】

路傍之杜鵑

【あらすじ】

桶町へと林道を往くが日が暮れてしまい立ち止まる男、不意に声を掛けてきた女の肌は青白く美しく――語らるるそれは桶町怪談。

「夏のホラー２０１１」参加作品。

# 序

逢魔が刻には鬼が哂う。
陽が堕つるその様を眺め佇む男がいた。
桶町へ続くという林道は薄暗く何者かが潜むように思える。男は生唾を呑み小さく震え、暗がりへと目を向けた。桶町へは林道を抜けるより他に道はなく。
「もし」
背に掛けられた細い声に思わず身を竦めた。
恐る恐る眼を向ければそこには青白い顔をした女が冷たく微笑んでいる。
「こないなところで何をなさってはるんですか」
その艶やかな唇に牙が隠れているように思えた。

## 弐

「桶町へ向こうてるんです」
「奇遇ですわね、私もですの」
結い上げられた黒髪は微か乱れ項へと落ち、そこより漂う色香は甘く濃く。紅を引く艶やかな唇は妖しく濡れ。紫の着物に金糸の蝶が舞っていた。
男は感嘆の溜息を漏らす。
「暗ぅなってしもて、怖ぁなってきたところでしたの。桶町までご一緒してくださいませ」
妖しく微笑む女の言葉に、躊躇いながらも男は小さく頷いた。
例え物の怪の類で在れ鬼の森を独り往くよりよかろうて。

## 参

陽も落ち闇が満つる。木々の隙間から夜空を見上げども月すら見えず。

男は背に感ずる女の甘い息遣いに色と欲を見る。ちらりと女を見遣れば女は妖しく微笑む。

不意に月明かりが射し女を照らす。

軽く乱れ肌蹴た胸元に男は眼を奪われた。青白く透り血の気はなく死して間もない骸を思い起こされた。だが骸が歩く筈もないと男は頭を振る。

井戸端で一枚二枚でもありゃあすまい。こんな宿六喰ろうても何の得もなし。

男は苦笑し頭を掻いた。

**至**

「どうかさらはりましたか」
鈴のように涼やかな声が耳に届く。
「いや見事なもんやなあと思うて」
「はあ、確かに綺麗なお月さんで」
「いえいえ貴女の肌ですわ。白磁よりも透っておりますな」
「あら、嬉しゅうございますわ」
ふっと男の手を小さく冷たい何かが包む。眼を向けると女が其の手を重ねている。驚きながらも男は女へと笑みを向けた。
旅は道連れ世は情けともいう。
今宵一夜の恋とて仏様も許されようと、男は一物を硬くした。

## 伍

「そんな強ぅ握らんといてくださいまし」
女がころころと笑う。
其の言葉にすら色を感じ欲を抑えられぬ男は背中越しに女を見遣り蛇のように哂って見せた。それでも女は誘うように妖しく微笑む。
「あすこに小屋が見えますえ。少しゆっくりしませんか」
「そうやな、そうするかの」
すっと女が指す先に古い小屋がある。我慢できぬのか、乱暴に女の手を引き小屋へと向かい戸を開けた。長く使われていない猟師小屋らしく、些か埃が舞った。

# 碌

小屋に入り戸を閉めると暗闇に堕つる。
背に女が縋りつく。其の柔らかい肢体が身体に絡み自由を奪う。触れる肌はとても冷たく耳元に届く吐息は熱い。だが鼻腔を擽るそれは生臭く花の香りには程遠い。
「おいおい、そないに急くなや」
だが所詮は男、色欲には勝てぬ。それもきっと汗の臭いだと思い至り、肩に置かれた顔に唇を寄せ頬を舐めた。だが舌先に感じたそれはとても先程の透った肌とは思えぬほどざらざらと乾いるように思えた。

## 質

不意に戸の隙間から月明かりが漏れ二人を照らす。
肩に顔を置くそれは干乾び腐り果てた老婆に見えた。白髪すらも抜け落ちぎょりとした眼は落ち窪み口元からは乱杭歯が覗く。間違いなく物の怪の類だった。
「ひっ」
おぞましい其の姿に男は身を強張らせ眼を閉じてしまう。
「も、もし、焦らさないでくださいまし」
だが眼を閉じれば耳に届くそれは鈴の音のようでありながら妖しく濡れている。熱い吐息が頬を撫ぜそれが男の恐れを崩した。

## 夜

月は雲隠れ、暗闇の中で何度も身体を重ねる。濡れそぼったそれが絡みつき更なる色欲の果てへ誘う。妖しく漏れる吐息と共に生臭いそれを感じたが、最早生死すらもどうでもよいと思うた。

何時しか淫楽は心すらも蝕み身に刻まるる甘美な傷に酔い痴るるそれは第六天魔王の地獄。

男は暗闇の中、ただ其の淫らな女に酔い痴れ溺れていった。

不意に戸の隙間から月明かりが漏れ二人を照らす。

男と身体を重ね妖しく喘ぎながら女は泣いていた。

## 茲

精の全てを吸い尽くさるるのかと思うほどに愛し合った。
其れに何の意味があろうかも分からずにただ只管に女を抱いた。
気付けば小屋で暗闇に独り裸で転がっており、あれは夢か幻かと思うたが、胸元に残る幾つもの痕に現なのだと知った。
美人局かとも思うたが銭は盗られておらず。
女と愛し合う最中、確かにあれは泣いていた。
不意に戸の隙間から月明かりが射し小屋の中をうっすらと照らす。
小屋の奥に干乾びた女の首が吊られていた。

**終**

苦悶に顔を歪め見開かれた其の眼には恨み辛みが満ちているように思えた。首の下に腐り果てた体が横たわり腐臭を放つ。

「お前はきっと愛されたかったんやな」

女の青白い肌も鈴のように軽やか声も絡みつく濡れたそれすらも、触れたことを体が覚えていた。

例えそれが物の怪であれ女は女。男は其の首と身体を外に埋め、女を偲ぶかのように手を合わせ弔った。

「では次は涅槃で会おうや、のぅ」

微笑む男の背に青白い女の影が哂っていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4612v/

---

逢魔が刻に鬼が哂う

2011年8月19日18時43分発行